



Title	養育性と教育
Author(s)	陳, 省仁
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 113, 1-12
Issue Date	2011-08-22
DOI	10.14943/b.edu.113.1
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46986
Type	bulletin (article)
File Information	113Chen-1.pdf



[Instructions for use](#)

養育性と教育

陳 省 仁*

On School Education and Young People's Nurturance Formation in Japan

Shing-Jen CHEN

Drawing on anthropological resources on childrearing practices in Japan, this paper points out the possibility that as a result of drastic changes in developmental niche, currently a large section of adult population of modern Japanese society suffers serious lack of nurturance, which has led to various social problems such as the so-called 'shoushika' (decrease in childbirth rate), childrearing anxiety, or increase in child abuse cases. It is proposed that school education can and should take some measure towards improving the situation by including materials relating to human development to current curriculum and providing hands-on learning opportunity aiming at facilitating nurturance formation of the younger generations. It is argued that through nurturance education, we can rethink what education should be for pupils as well as for the society in general.

Key Words : childrearing culture, nurturance, developmental niche, *shoushika*, babysitting, malformation of nurturance

**Education as a political weapon could not exist
if we respected the rights of children.
Bertrand Russell, 1916**

はじめに

ラッセルが言う政治的道具とは公的教育のことである。ラッセルによれば今から約1世紀前の当時イギリスや西欧の教育は政党或は教会によって把持されていた為、真の個人のための教育にはありえないという。更に、ラッセルが言う「子どもの権利」というのも子ども自身が発言権がない為、自らの権利を主張するわけにはいかない。子どもの権利を尊重するために、真に子どものことを考える代言人が必要である。ラッセルは政府や教会による公的教育を信用しないことはこの引用からも分かる。ラッセルの公的教育への懐疑は今日の日本の社会状況を考えてもある程度領けられる。特に小さい子どもの真の代言人の不在による子どもの権利への侵害は深刻というべきである。

*北海道大学名誉教授、現・光塩学園女子短期大学教授

ある国立大学に勤めているかつての同僚に聞いた話であるが、入試や委員会などの大学の行事のため、幼い乳児を持つ養育者が分配された職務を全うするため、子どもを犠牲にせざるを得ない状況は稀ではないという。些細のことと思われるが、人間の教育のことを最も大事にするはず、そしてそのことについて最も期待できるはずの知識人集団で起きるこのようなことは、まさに幼い子どもの権利の代言者の不在の事実を突き付けられたものである。これは現代日本社会の養育性の欠如の一例である。

論者が言うかも知れません：養育者が公平原則に基づいて分配された職務の遂行のため、偶に小さい子どもが付設の保育所に午前6時に預けられるのは子どもの発達に悪い影響はないと。確かにこのような因果関係の帰属や立証は困難である。しかしここで問題にしたいのは現代日本社会のエートスの問題であり、あるいは別の言い方で言えば、これらの例の中に見られる子どもに関する大人の共感性や想像力の貧困さの問題である。このようなことが高等教育の関係者に起きることは寧ろ日本社会における教育の思想や制度に養育性が欠如している証拠であるとさえ言える。口のない乳幼児のために大人が主張してあげなければ、子どもたちの権利はいかに尊重されるのであろうか。

では日本社会は何時頃から養育性の欠如が始まったと考えられるか。否、この問いに答える前にまず日本社会と養育性の関係を整理する必要がある。

この両者の関係について、3つの可能性が論理的に考えられる

- 1 養育性は最初から存在せず、従ってある時から消えることも言えない。
- 2 社会発展の過程において、相対的に社会の規模が小さく、子育ての営みが社会全体の関心事であった時代に養育性が存在したが、社会変動によって養育性が希薄になり、もしくは消失する。
- 3 養育性は特定な条件や人間の努力によって出現する。条件依存的である。

本論では、先ずは上述1.の可能性を否定し、人間社会の進化において養育性が発生すること論じながら、2.と3.の可能性について検討する。その為、近世日本社会における養育性の存在を外国人の観察者の証言と幾つかの証拠を挙げて論ずる。更に、現代日本社会に起きた激変の中、従来の養育性形成システムの崩壊による現代的養育性形成不全の現象を述べ、最後はこのような状況の中に、養育性形成の課題を学校教育が如何にその責任を負うべきかを論ずる。

1. 子育ては人間の心性の源

先ず子育ては文化の重要な一部分であると言う仮説から出発する。このことは今日では必ずしも明らかでなくなった。否、寧ろこの言い方は今日ではかなり強引な言い方さえ聞こえる。この仮説の妥当性を評価するために、人間社会の進化の初めころを想像してみる。

人間はその個体生命の継続には子育てが不可欠である種である。子育ての為に様々な条件が必要のも当然である。例えば、先ず子どもを風雪の寒さや湿気及太陽や高温から守るためのシェルターや住居を営造したり、子どもの発達状態や健康の具合に応じて食べ物を用意するにも多種多様な工夫が要求される。更に育児の道具や用品の製作にあたって、材料を物色し加工をするのも無論必要である。このように子育てにまつわる物理的条件の整備のために、原始的でありながらも一種の技術の体系と言えるものが存在しなければならない。子育ては

これらのテクノロジーの形成の唯一の動機ではないかも知れないが、重要な原動力の一つと言えるであろう。

子育てのためのテクノロジーと同様に、人類の祖先は子育てを通して様々な心理的・行動的反応も形成されると考えられる。今日我々が本能と呼ばれるものの中に、子育てがその進化のきっかけであったものも含まれていると想像される。ヒトの情動反応や心理は天から降ってきたものでなければ、最初はある範囲のバリエーションを示した情動・行動反応から始まる、長い年月の選択淘汰の過程を経た産物と考えることができると思われる。詳細なメカニズムや変化の過程は分らないが、子育ては上述したテクノロジーと同じく、その形成の重要な原動力或はオルガナイザーの一つと想像するのは牽強付会と言われないであろう。これまで挙げられたことと関連して、子育てにおける大人の他人の子どもも可愛がる心性、子どもへの共感、同情、子どもの行動を許すなどの心理的傾向（メンタリティー）も同様である。言い換えれば、ボルビー（John Bowlby）が愛着理論で言う養育行動など愛着関係の基礎になる心理的・行動的反応は子育ての営みに起因し、それによってシェーピングされてきたものと考えられるのである（Bowlby, 1984）。

上の考え方の延長線上で考えていけば、家族という制度も子育てによって動機つけられると言えないのであろうか（今西,1951; Mead, 1949）。

2. 日本の子育て文化

人間発達の始まりを受精から考えるなら、受精から出産分娩までの過程は強い生物学的・生理学的機構に支えられているとも言える。性行為もその後の分娩や哺乳と同様に、動物と同じくたとえ文化の関与が全くなくても行えると考えられる。しかし、人間の場合、子どもの哺乳をいつまでも続けるわけでもなければ、哺乳のみで子どもが成人し社会の一員になるのでもない。子育てには文化が関与するのである。乳児の扱い方一つを例にとっても、どのようなときに話しかけるか、どれくらい話しかけるか、どのように話しかけるかの多くは特定社会の固有の文化によって規定される。また、離乳食のことを考えても状況は同じである。例えば、現在の日本社会では普通の健常の乳児なら、生後4、5か月から養育者が離乳食を導入し始めるのが普通であるが、これは決して人類普遍的ではない。現存人類社会の環境の多様性から考えれば、それぞれの社会の子育てにおけるこの点に関しても多様である必然性がある程度想像ができよう。離乳食として乳児に何をどのように食べさせるか、何時から始めていつまでするかなどは社会によって異なり、当該社会の子育て文化の一部分と考えるべきである。

子育てを人間性の源と考える前節の話は人間社会の進化をその始原からのちの時代までの進化を想像する思考実験とすれば、子育て文化についての議論は前者と逆の方向の試みである。前者はヒトという種の共通な生活状況の想定から始まったが、後者は人間生活の伝承的歴史性と人間集団生活の舞台である環境の多様性に重点を置いた産物である。

子育て文化を文化の一部として考えた場合、日本社会の子育て文化は近隣の他の社会のそれと大きな違いがあるように思われる。歴史的発展の過程やそれを規定する諸要因も必ずしも十分に把握されていないが、江戸時代の日本社会には独特な子育て文化があったと言えるようだ。これは主に以下の幾つかのことから示唆された仮説である。

1. 子育ての社会的環境の整備：教育史学者の研究によれば、幕藩体制下、庶民の

生活は決して豊かではないが、村落共同体は一つの完結した世界が確立されていた（山住・中江，1976:1, p. 5）。明治の初めに7万を数えた日本の地縁集団は日本の独特の子育て文化の原郷と考える。人類学者のきだみのるの表現を借りれば、部落では、「百姓は生まれ、育ち、自分で労働し暮らしを立て、生殖し、子を残して死ぬことしか願わない」地域社会なのだ（きだみのる，1967:146）。

2. 書物や図像学的資料：上に述べた独特な日本の子育て文化の存在を示唆するものとして、豊富な書物、文献と図像的資料がある。例えば、大よそ 17 世紀初め徳川家康の時代から明治前期の 19 世紀末までの 300 年間の日本の育児思想を代表する育児関係の書物が多数存在する（山住・中江，1976）。このようなことは恐らくほかに例を見ないであろう。又、19 世紀以降の江戸の後期の出版物の中に、数多くの挿絵に大人と一緒に子どもの姿や子育ての風景が描かれていた。これらの絵の背景は町もあれば田舎もある。これらの表象はある程度この時期の日本社会の子育ての習慣や日本人の子どもへの関心を示すと考えるのはそれほど迂闊なことではないであろう。

- 3 近代来日した西洋人の観察：ある程度の直接の観察に基づいたと思われる観察は早く16世紀から現代まで見られる。山住によれば、天文年間(A.D. 1532-1555)日本に来た宣教師は「日本国にてもっとも善良な少年の養育にて、あえて外国人のおよぶところにあらず」（山住・中江前掲書 p. 4, 『日本西教史』よる引用）。滞日30年以上日本で歿したフロイス(Luis Frois)も本国ポルトガルへの通信に「子を育てるにあたって決して懲罰を加えず、言葉を以て戒め、6, 7歳の小児に対しても70歳の人に対するように、真面目に話して譴責する」と報告した（前掲書）。フロイスはさらにこのような日欧の育児方針の違いを「自然の与える援助を使うだけである」という日本社会の人間発達観と関係すると指摘した。

山住らによれば、日本の子育てに対する西洋人の評価は後も続く。明治10年来日したアメリカ人の動物学者モース(Edward Morse)は2年間の滞日の経験を綴った Japan Day By Day (日本その日その日)で、日本人の子育てを褒め称えて曰く「世界中で日本ほど、子どもが親切に取り扱われ、そして子どものために深い注意が払われる国はない」。また「私はいままでのところ、おかあさんが赤ん坊に対してかんしゃくを起こしているのを一度も見ていない。私は世界中に日本ほど赤ん坊のために尽くす国はなく、また日本の赤ん坊ほどよい赤ん坊は世界中にないと確信する」と続く（モース，1917/1961: 184）。

現代において、日本に長年のフィールドワークをしたイギリスの社会人類学者ヘンドリー(Joy Hendry)も上に述べた外国の観察者の見解を指摘した。同じ傾向のちにベネディクト(Ruth Benedict), ラーナム(B. Lanham), マロニ(J. C. Moloney)とドーア(R. P. Dore)にも見られた(Chen,1996)。

これまで述べてきた点から見れば、近代までの日本社会は独特の子育て文化が形成されたと考えられる。現代の民俗学の資料から、日本の子育て文化の大部分は第二次世界大戦後まで維持されたと推測される(柳田, 1989; 牧田, 1990, 小嶋, 1989; 太田, 1990; 2007)。日本の伝統的子育て文化の特徴の一つとして、自立を価値とする現代の西欧の研究者が「甘やかす」

(indulgence) とやや批判的に指摘する日本人の子どもを完全に受け入れる態度がある。かつて私がこれを positive childishness と呼んだこともあった (Chen, 1996)。

子育ての過程を川を渡ることには喩えれば、西欧や中国などの社会においての大人の態度は手招きなどで未熟の領域である向う岸にいる幼い子どもを大人の側に導くことであれば、伝統的日本社会の態度は、子どものいる向う岸に大人が自ら涉って、子どもの手を引いて川を渡らせるようである (Chen, 1996)。伝統的日本社会の大人は子どもという文弱な存在自体は価値のあるものと感じ (子宝) かつそれを労うと考えられた (吉川, 1978)。

伝統的日本社会の子育て文化も社会変動と現代化という過程の中に変貌してきた。特に戦後における激しい社会変動の中、伝統的日本の子育て文化が継承されなくなったという事実があった。少子化や様々な子育ての問題に直面している現代の日本社会の姿を眺めている中、大人たちが先に触れた子宝思想や幼い者を労う感情を失っていると感じられる。

冒頭に挙げた養育性と特定社会との論理的関係のことから言えば、18, 19 世紀ころの日本社会は養育性の豊かな子育て文化を有していたと仮定するのはある程度妥当と思われる。今このような子育て文化の成立と出現の過程などについて議論するのは筆者の能力を超えるが、これからの子育ての歴史や社会発展史の研究に期待したい。以下の議論は日本社会の子育て文化の現在に目を転じたい。

上にも触れたが、現代日本社会において、伝統的 (良き) 子育て文化が断絶したという嘆きはしばしば聞こえる。特に少子化や子育ての困難が社会問題となってきたこの 3, 40 年来、このよう言い方がますます増えたのも事実であろう。では、何故長い間に培われてきた子育て文化、特にその精神的基礎である養育性が問題となったのか。また、もし不幸にも本当に現代日本社会の養育性が希薄もしくは不在であれば、それを打開する方策はないか。これらの問題について筆者の考え方を述べる前に、人間発達のニッチとしての養育性形成について考察していきたい。

3. 人間発達のニッチ

この地球上子育てをしない社会はない。勿論子育ては人生のすべてではない。けれども人間にとって子育ては、社会生活の重要な一部分である。社会が存続する限り必ず子育てをする。また、子育てができれば社会の存続も可能になる。ヒトの社会の起源は一つの謎であるが、その人間集団の起源において子育てが重要な一環であることは確かであろう。人類社会の子育てを理論的に捉えるために、スーパーとハークネス (Super & Harkness, 1986) が「発達のニッチ developmental niche)」という概念を提出した。この概念提出の背景には、従来の発達心理学が普遍性を強調するあまり、子どもの発達を社会・文化的文脈を捨象して扱ってきた事実があった (Super & Harkness, 1986)。

スーパーとハークネスによれば、人間発達、特に子どもの発達をより良く理解するには、文化が如何に子育てを構造化するか注目する必要がある。発達のニッチはそのような概念である。本来、「ニッチ」とは「西洋建築で厚みのある壁をえぐって作ったくぼみ」のことで、生物学ではこれを「ある生物が生態系の中で占める位置」と転用した。発達のニッチは子育て (あるいは人間発達) のシステムを捉える概念で、3 つの要素で構成される。一つは子どもが暮らす物理的・社会的環境のことを指す。子育ての物理的背景は水田地帯の農村なのか、遊牧生活する草原なのか、

あるいは新しく造成された大都市郊外の団地なのか。また、社会的環境は「向こう三軒両となり」の関与のある地域社会を含むか、それとも都市部高層マンションの一室か。また、朝 8 時から夕方 6 時まで子どもを預ける保育園なのか。環境の違いによって、子どもの人間関係、病気や栄養、火災、墜落や溺死などの発生率や対処の仕方も異なる。二つ目は歴史的に形成されてきたある社会の子育ての習慣である。乳児は畑などの仕事場で働く母親に負んぶされて育つか、かつての日本東北の農村地帯で行われた「嬰兒籠（えじこ）」子育てなのか。また、暗い所で一人で寝かされるか。割礼を行う風習があるかなどはその例である。この要因の違いによって、子どもの人間関係、視覚機能の発達、社会的相互交渉の量、養育者の身体運動への適応能力などが異なる。三つ目は特定社会が共有する育児に関する養育者たちの信念と心理である。新生児・乳児を頑丈な存在と捉えるある社会の養育者の子どもの扱い方は、脆弱な存在と捉える別の社会の養育者をびっくりさせるであろう。

4. 養育性と子育て文化の持続可能性

これまで見てきたように、子育ては社会全体にとって重要な活動である。一方、多くの個人の人生においても重要なできごとである。このように、個人が子育てを通して自己の生命を次の世代に継続させることができるだけでなく、多くの社会の成員の子育てによって社会の存続そのものが確保されるのである。人間社会において子育てに苦勞する人もいれば、楽しさを満喫する人もいる。人間にとって、子育てを生甲斐とを感じる人も多いはずである。

子育てを通して人間が成熟すると言われる。成熟した人格の重要な一側面は養育性と考えられる。このように考えると、主に実際に子育てを経験した人々に形成される人格の特徴としての養育性は、ヒトの成人期人格・心性発達の産物である。このような個人の人格・心性の特徴は社会生活における一つの価値になる。最初は自分の子どもに対して生じる養育性は、やがて他人の子どもに対しても、ひいては障害者や高齢者など人の助けを求める対象者に対しても表現される。現在我々が普遍的な人間性と考えた人間の態度や行動傾向（例えば弱者に対する同情、慈悲や思いやり）は、本来子育ての営みの中で形成されてきた歴史的副産物と考えられる。これらによって逆に子育てが可能になり社会集団が存続してきた。子育ては個人の養育者の性格を変えるだけでなく、人間集団を特徴づける人間の性格をも育ませてきたのである。

スーパーとハークネスは前節で述べた「発達のニッチ」という概念を子どもと文化の間のインターフェースとして考えている。確かにこの3つの要素は子育てを支える最小限の要素と言える。しかし、子育てのシステムは世代から世代へと継続させて行かなければならぬ。言い換えれば、子育てという営みの持続可能性を保証するために、もう一つの要素が必要と思われる。それは養育性である。養育性とは「相手の心身の発達や状態の改善に必要な態度、知識と身体技術」と定義することができる。また、上にも触れたが、養育性は子育てを通して獲得された成熟のした人格の要素でもある。養育性の形成のシステムが含まれていない発達のニッチあるいは社会では、様々な人間発達問題が生じ、極端な場合には子育てのシステムの持続可能性が危ぶまれる。経済成長期以降の日本社会では発達のニッチの急変によって、養育性形成が困難もしくは欠如の状態に陥ったと考えられる。その結果として後で挙げる幾つかの人間発達の問題が生じ、養育性形成をさらに難しくさせている。

上述スーパーとハークネスが考えた3つの要素は、ある社会の子育てを形式的に捉えてい

た。ここで論じている養育性というもう一つの要素は、子育てがほどほどの条件と環境を得られて営まれる場合、その社会の大人が獲得した結果としての養育者の信念と心理であると考える。発達のニッチの形式的側面は、異同があるがおおの社会それぞれがすべて備えている。一方、子育てを内容的に捉える養育性という要素は、社会によっては若者にそれが形成されていない、つまり欠如の場合もある。若者の養育性が形成されることによって、その社会の子育ては持続可能なシステムになり、逆に若者が養育性形成不全に陥れば、その社会の子育ての持続は困難になり、様々な人間発達の問題が生じてくるはずである。発達のニッチの内容的側面のもう一つの要素と考えられる具体的な例を、アメリカ社会におけるベビーシッターという制度に見ることができる（7節参照）。

5. 現代日本社会の発達のニッチと子育ての問題

戦後日本社会は 1950 年代から朝鮮戦争を機に経済が勢いよく発展し始めた。これにともなって、人口の都市集中化、家族形態の核家族化、地域社会の消失及び子どもの数の減少が短期間で現れた。1960 年代の半ば頃は経済発展のピークになり、これらの社会的変動の傾向も更に激しくなった。これらの急激な社会変動は幾つかの人間発達の問題をもたらした。例えば、少子化、乳幼児遺棄・子ども虐待事件の頻発、発達障害児・者の急増、及び様々な人間発達の問題が顕在化した。

急激な社会変動は現代日本社会の「発達のニッチ」の急激な変動にも反映される。上で述べた「発達のニッチ」の 3 つの側面に沿って、1970 年以降の 40 年間の子育てを具体的に考えて見よう。

子育ての物理・社会的環境の側面について：人口の都市集中化以前の 1960 年代まで、多くの子どもは人数の多い大家族あるいは拡大家族で育てられた。一緒に暮らしていた家族には、両親以外の大人（例えば親の親や親の兄弟姉妹）や他の子ども（例えば親の兄弟姉妹の子ども）が含まれていた。当然、子育てはこれらの人達の間でなされることも多かった。一方、地域社会においては異年齢の子ども集団の存在が一般的であった。家庭の内外における子どもたちの遊びと学習やしつけなどの経験は多様であった。子どものしつけや社会化は「向う三軒両隣」という地域社会の影響を受け易く、近年の子育てと比べてかつての子育てはより開放的と言える。

子育ての習慣や養育者の信念・心理に関して：社会環境の急激な変化によって、大きく変わった。従来の風習が捨てられ忘れられ、一方新しい習慣が定着しつつある。一例をあげれば、負んぶ紐で乳幼児を背負うのは見られなくなった。子どもを地域に結ぶ様々な行事も行われなくなり、大人の側の地域の子どもへの関心や責任感も薄れてきた。

最後は養育性の形成について：社会が経済的に裕福になり日常生活の中で年長の子どもが小さな乳幼児をあやしたり負んぶしたりして世話する必要がなくなった。少子化や核家族化の結果によって、成人するまでの期間においてほとんどの若者が子育てへの参加や見習いをする経験が皆無である。本文の冒頭でも指摘したが、ヒトは動物と同様に生得的本能で新しい個体を作ることができても、その個体を社会の一員として育てるためには集団と文化の助けが不可欠である。子育て文化の産物と考えられる大人の養育性が、社会の若者が成長するまでの十数年の間に形成されていなければ、社会の多くの大人が子育てに大きな困難を感じ、

育児から逃避したり、あるいは子どもを虐待したりすることが多くなる。たとえ子ども虐待を意図的に努力してある程度避けられたとしても、困難を沢山抱えて日常の子育てにおける不適切な育児行動は続けられる。ある社会の多くの大人の養育性形成不全の結果として、子どもに様々な発達障害を生じさせることも考えられる。

上に述べたように近年来の日本社会が直面しているいくつかの社会問題は、若者の養育性形成の不全による人間発達の問題として捉えることができる。

少子化：1989年の「1.57ショック」以来、少子化は大きな関心を引き寄せてきた。中央政府に「少子化対策大臣」が任命され、各自治体は様々な子育て支援策を打ち出し実施してきた。しかし、少子化の傾向は止まらず、近年の特殊合計出生率は更に低く1.37になった。少子化の原因は単純ではないが、適齢期の男女が子育てに必要な子どもについての認識、様々な状況に対応する態度や身体技術を持たず、あるいは不十分であれば、たとえ結婚しても子どもを生まない、生むとしても少なくするなどの傾向が強くなるだろう。少子化はその一つの結果であろう。

子ども虐待：1990年頃から各自治体の児童相談所に届けられた子ども虐待に関する相談件数が急激に増加し、その後も年々高くなり2009年には年間4万件を越した（厚生労働省大臣官房統計情報部報告を参照）。

子どもの虐待の多発の原因も少子化同様に、決して単純ではないが、昔のような子育てが見える地域社会の消失、大都会に有り勝ちの密室の子育て、その結果の養育者の孤立などの状況に養育者の養育性形成不全という要因を加えると、子ども虐待のリスクは大きくなると考えられる。

発達障害：精神医学や臨床心理学において、広汎性発達障害は器質的原因による様々な発達初期から見られる障害や機能不全を指すが、今なお十分にその原因が明らかにされていない。これらの問題はこの二、三十年急に増えてきた現象という事実から考えれば、多くの養育者の養育性形成不全との関連は排除できるだろう。むしろ、養育性形成不全の養育者が子育てを強いらられる中で、幸い子ども虐待に至らなくても、乳幼児の正常の発達に必要な条件が大きく損なわれた結果が、発達障害と関連するのではないかと想像している。

6. 養育性とその形成過程

養育性は英語の *nurturance*（ナーチュランス）の訳語である。「養護性」という言い方もあるが、養護学校、養護施設など特定の意味をもつ用語が使われているため、ここでは「養育性」という語を用いる。養育性 (*nurturance*) という概念を最初に系統的に扱ったのはアメリカのパーソナリティ心理学研究者ヘンリー・マレー (Henry A. Murray) である。1938年の著書において、マレーが養育性を「無力の者の求めに同情し助ける行動をすること」と定義し、人間においてそれが生じる様々の状況や対象を挙げ、更に「養育的」と言える20個の主観的陳述と15個の養育的感情の陳述を考案した (Murray, 1938, pp. 184-187)。この概念をさらに展開したのはフォーゲルとメルソン (Fogel & Melson, 1986) である。

日本において小嶋秀夫がナーチュランスという用語を使い、それと他の心理学の概念、例

えば、利他性や愛着との関係及び「支配性に基づいた愛玩」や「自己中心的な共感」更に「自己愛的なやさしさ」との区別について見解を述べている（小嶋，2001: 第7章）。また、小嶋は養育性の現われと人生の各時期においてそれと結びつくと考えられる経験を表にした（表1、小嶋，2001, p. 161）。

表1 ナーチュランスの現われとそれに結びつくと考えられる経験

乳児期	養育者に直接世話・相手してもらう経験 養育者が他の対象の世話・相手をするのを観察
幼児期	→養護的相互作用の再現，養護的役割の内面化 人，生き物の世話・相手をする経験
児童期	疲れたり，元気を失った相手への共感
青年期	頼られ信頼される経験とそれが自分にもたらずものへの 気づき
子育て期	幼いものへの関心・プラスの構えと，養護的役割の予期 養護的構えと子どもへの敏感性・応答性の発揮 わが子の可愛さ→一般化された養護性 自分の成長への気づき
中年期以降 老年期	周囲の年老いた人びとへのほのほのとした感情といたわり 幼子との経験の共有，動植物との交流による慰めと元氣， 若者の美しさを認めた自己受容，老親への共感

（小嶋秀夫，2001, p. 161 による）

小嶋によれば、養育性は広い年齢範囲のヒトがもちうる特徴である。その形成は愛着理論が主張するように、「やさしい親に育てられた人が親になってから子どものよい関係を発展させる」だけでなく、「子どもが兄弟や年下の子どもを含んだ人々との相互作用や、動物との遊び・世話の経験内容が関与する」と考えた（小嶋前掲書，第7章）。言い換えれば、幼少期の日々の暮らしの中において、異年齢の人々との相互交渉における「世話してくれる者」の表象を自分の中に認めるとともに、相手の中に「世話される自分」の姿を重ね合わせる経験が関与するのだ。すなわち主体の立場と対象の立場の共存または交代が子どもの内面に養育性役割を形成していくのだ（小嶋前掲書，第7章）。

小嶋の養育性形成の考え方に更に、ここで2つの点を付け加えたい：1つは、成長中の子どもの周りの大人の養育者としてのモデルの重要性である。具体的にいえば、成長中の若者にとって、援助を必要とする相手への望ましい姿勢・態度、声かけ、言葉遣い及び援助時の身体的技術についての学習を可能にすることである。もう1つは、これらの体験や学習を可能にし、それをサポートする社会的環境の重要性である。

養育性は、個人の能力あるいは人格特徴の側面、及びある時代やある社会の全体としての特徴の側面という2つのレベルをもつ。養育性の形成によって、ある時代やある社会の子育てを世代間継続していける。逆に、養育性の形成が不全であれば、少子化、子ども虐待、育児ノイローゼ、ひいては様々の発達障害など人間発達の諸問題が生じる。このように考えれば、養育性とその形成はある社会の子育てを維持可能なシステムにするための重要なもう一つの要素と言える。養育性の形成は発達のニッチの2つ目の要素－育児の習慣－の一部とし

て捉えることも可能である。けれども、下に述べる現代日本社会に生じるとされる「養育性形成不全」の事実を考えれば、むしろ発達のニッチの第4の要素として強調した方が妥当と思う。

7. 養育性形成のシステムの一例：アメリカ社会におけるベビーシッター

上述第3節で発達のニッチの概念を紹介した際に、スーパーとハークネスが挙げた3つの要素に付け加えるべき、第4の要素を提案した。この発達のニッチの内容的要素の具体例は、アメリカ社会におけるベビーシッターという制度であると考えられる。この制度の歴史についてなお不明な点が多いが、少なくとも1970年代以降今日までのところ、かなり一般的であったと思われる。2009年に発表されたアメリカのニューオーリンズ州での就学前児童を持つ母親200名と大学生248名（男性103名女性145名）に対する調査によれば、78%以上の対象者はかつてベビーシッター経験者であった（Shwalb, Shwalb, Chen, Kusanagi, & Kawata, 2009）。

ベビーシッターというアメリカ社会の子育ての習慣は、多くのアメリカの若者の養育性の形成の装置という機能を果たし、アメリカ社会の発達のニッチを持続させていると考えられる。この習慣を養育性形成のシステムとして成立させるには、3つの重要な構成要素がある。即ち、①ベビーシッターになる若者：アメリカの習慣と法律によって、12、3歳からベビーシッターになることができる。お小遣い稼ぎの手段としてベビーシッターの役割は魅力的であり、多くの若者がなりたい。②若者の親：自分の子どもに、お小遣いを獲得し、将来の養育者としての責任感を鍛えられるチャンスとしてベビーシッターをすることを奨励することが多い。③ベビーシッターを雇う乳幼児を持つ養育者：ベビーシッターのお蔭で育児の重荷から解放され社交関係・夫婦関係を増進することができる。この3つの要素の良性循環によって多くの若者の養育性形成が促進され、若者がベビーシッターとして自信を持ち信頼もされる。かつてベビーシッターを経験した乳幼児の養育者は、自分の経験に基づいて抵抗なく有能そうなベビーシッターを選んで信頼しこのシステムを利用する。ベビーシッターの親たちはわが子を奨励し援助する。このように3者ともそれぞれの立場から社会の養育性形成のシステムを支える。

養育性形成のシステムを発達のニッチの第4の要素として考える意義は、ベビーシッターの習慣の無い現代の日本社会の子育てと比べれば一層分かり易い。自ら子どもを産み育てるまで、現代の日本の若者の多くは、ほとんど子育てに参加する機会がなく、子育てに必要とする知識・態度と身体技術の獲得状態は不十分であり、子育てに大きな困難を感じる。養育者になってから、いざ必要があっても、若い時の自分の乏しい経験に照らして他人の若者に自分の子どもの世話を任せることに抵抗を感じる。若者の多くは経験していないため、いざ乳幼児の世話を頼まれても自信を持って引き受けることができない。若者の親たちは次世代の養育性を考えることさえほとんどなく、子どもたちの養育性形成に一役を買うこともできない。無論、上の説明はあくまでも養育性形成のシステムという概念をより把握できるように施したのである。言うまでもないが、ベビーシッター制度の存在によってアメリカ社会の人間発達の問題がないというわけではない。これは別の問題と考えるべきである。

最後に、ベビーシッターのような習慣は決してアメリカ社会しかないと言う訳ではなく、

多くの伝統社会や未開社会において広く見られた現象である (Weisner & Gallimore, 1977)。事実、高度経済成長期までの日本においても、ベビーシッターのような名称こそないが、弟や妹を負んぶしながら遊ぶ子どもの姿は各地で見られた。ここで強調したいのは、現在の日本ではこのような光景がほとんど消えたという事実とその結果として多くの若者にとって乳幼児は遠い存在となったことである。

日常生活において、若者たちが乳幼児に接近し彼らを世話する中で養育性の基礎を築くことができたと思われる。これらの社会や時代と比べて、最近 40 年近くの日本の若者の養育性形成ははなはだ不十分ではないかと思われる。これを養育性形成不全仮説という。もし日本社会は養育性形成不全に陥ったとすれば、どのようにこの状態から脱出することができるのか。以下は養育性形成不全に対して、学校教育の役割について簡単に述べる。

8. 養育性形成と学校教育の役割

若者と最も密接に関連するのは各レベルの学校である。従って、養育性形成不全から脱却する最も有効な方法のひとつは、各レベルの学校教育で養育性形成の問題を取り上げることであろう。

伝統的に、学校教育の内容は国語、算数、理科、社会、音楽、美術と体育と考えられ、養育性やその形成は家庭の責任であり、少なくとも、学校の守備範囲ではないと思われてきた。しかし、これまで話してきたように、高度経済成長によって、の本での人間発達のニッチが大きく変わってきた。その中で失ってきた養育性やその形成の社会的装置を取り戻すために、学校教育は逃れることのできない役割をもつと考える。

ただし、この提案に対して最大の抵抗は学校にある。よく出されるのは既に抱えている様々の課題の上に、更に重い負担になると言う危惧であろう。しかし、現行の全ての教科の教材の僅かのパーセンテージの内容に養育性形成と関連する子育てや人間発達の事象を入れ替えるだけであれば、負担増を回避できる。例えば、国語の教材の「サイタ、サイタ、サクラがサイタ」を「ナイト、ナイト、アカチャンがナイト」に変えるように。このように、赤ちゃんや泣きなどの内容の導入によって、生徒は子育てや人間発達の事象に親しむ、更に、教師の工夫によって、例えば、泣きの種類や泣きの理由、泣きをなだめる方法などの話題へ展開することが考えられる。また、例えば、授乳、オムツ、離乳食など乳幼児の生活と密接に関係する事象なら、理科、算数、社会などどんなレベルの教科内容にも作り直すことができるであろう。言い換えれば、子育てと人間発達とに関連する事象に取材すれば、大きな負担なしで、現在の教科書より多くの養育性の形成と関連する内容の教材をつくることが可能と思われる。

教室での座学と同時に、学校近隣の地域社会の乳幼児と直接に触れ合う学習を工夫すれば、かつての家庭や地域社会が提供してくれた養育性形成の機会をある程度取り戻すことも夢ではない。

引用文献

- Bowlby, J. (1984). *Attachment, New Edition*. Harmondsworth: Penguin Books.
- Chen, S.-J. (1996). Positive childishness: Images of childhood in Japan. In C. P. Hwang, M. E. Lamb, & I. E. Sigel (Eds.), *Images of childhood*. (pp. 113-127). Mahwah, NJ.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Fogel, A. & Melson, G. F. (1986). *Origins of nurturance: Developmental, biological and cultural perspectives on caregiving*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- 今西錦司(1951). *人間以前の社会*. 岩波書店.
- きだみのる(1969). *にっぽん部落*. 岩波書店.
- 小嶋秀夫(1989). *子育ての伝統を訪ねて*. 新曜社.
- 小嶋秀夫(2001). *心の育ちと文化*. 有斐閣.
- 牧田茂(1990). *日本人の一生*. 講談社.
- Mead, M. (1949). *Male and female*. New York: William Morrow.
- Murray, H. A. (1938). *Explorations in personality: A clinical and experimental study of fifty men of college age*. New York: Oxford University Press.
- Mors, E. S. (1917 / 1961). *Japan day by day*. (日本その日その日, 石川欣一訳, 平凡社).
- 太田素子(1994). *江戸の親子*. 中央公論社.
- 太田素子(2007). *子宝と子返し*. 藤原書店.
- Russell, B. (1916). *Principles of Social Reconstruction*. London: Allen & Unwin.
- Shwalb, D., Shwalb, B., Chen, S.-J., Kusanagi, E., & Kawata, N. (2009). *Babysitting experiences and the development of nurturance: A study of young mothers and students*. Poster presented at the Meetings of the Society for Research in Child Development, Denver, Colorado, April 4th, 2009.
- Super, C. & Harkness, S. (1986). The developmental niche: A conceptualization at the interface of child and culture. *International Journal of Behavioral Development*, 9, 545-569.
- Weinsner, T. S., & Gallimore, R. (1977). My brother's keeper: Child and sibling caretaking. *Current Anthropology*, 18(2), 169-190.
- 山住正巳・中江和恵(1976). *子育ての書* 1, 2, 3. 平凡社.
- 吉川幸次郎(1978). *文弱の価値*. (吉川幸次郎・佐竹昭広・日野龍夫校注 「本居宣長」 筑摩書房)